

活動を広げていく生活科の学習

—複式低学年「町探検」の実践から—

佐 和 真由美

1 はじめに

複式学級での子どもたちの活動の様子を見ていると、学年よりもその子の生活体験の方が、活動に大きな影響を及ぼしていると感じることがある。だからこそ、生活科でのいろいろな体験が、子どもたちにとって大切であると言える。しかし、その活動が細切れで、子どもたちが一つ一つの活動に追われるのでは、豊かな体験とは言えないであろう。そこで、複式学級の特性を生かし、上学年が前年度の活動体験を元に、自分なりに見通しをもった活動に取り組み、また下学年が、そういう上学年の活動から刺激を受け、少人数でも豊かな活動になるよう継続した単元に取り組むことにした。この単元は、活動のたびに新しい発見があり、子どもたちが自分のめあて意識をもって活動を修正しながら取り組みやすい探検活動にした。2年生にとっては、「学校探検」が昨年度よりの継続活動となり、ここから初めての「町探検」へと活動を広げていくことになる。さらに、この活動が3年生社会科への橋渡しともなろう。また、1年生は「学校探検」で、2年生の活動に刺激を受けながら、人やものとの関わり方を体験した上で「町探検」に出かけ、来年度も活動を継続していく。本稿では、このような探検活動の中から「町探検」を通して、調べたいことを自分で決めて、自分なりのめあてにそって自分の不思議を解決していこうとする子どもの姿を探っていききたい。

2 活動の実際

(1) 単元について

探検活動は、子どもたちの大好きな活動のひとつである。自分の知らない世界をのぞいてみたい、という活動的な子どもたちの気持ちに応えてくれる活動だからであろう。「学校探検」で学校とのかかわりを深めてきた子どもたちは、「町探検」で、学校を中心とした町へと活動を広げていく。子どもたちが自然や人々、建物などを自分なりのめあてにそって調べることで、この活動が普段見過ごしている事がらを再発見したり自分たちの生活の場や人々の様子などに関心をもったりするよいきっかけとなるであろう。

本校は校区が広く、子どもたちは他の区や町から交通機関を利用して通学してくることが多い。そのため、本学級でも学校周辺のことを知らない子が多く、近所の人とかかわることもほとんどない。1年生は、これまでの学校探検を通して少しずつ校内の人とかかわれるようになってきており、「～を見た。」という自分なりの発見ができたことを喜び、地図やメモに書き込む姿が見られるようになってきた。2年生は、「～はどうしてか。」ということにも目が行き始め、「もっといろいろな人に聞きたい。触ってみたい。」という気持ちが強くなってきている。また、これまで探検の仕方などを1年生にアドバイスしながら共に探検活動を楽しんできた。

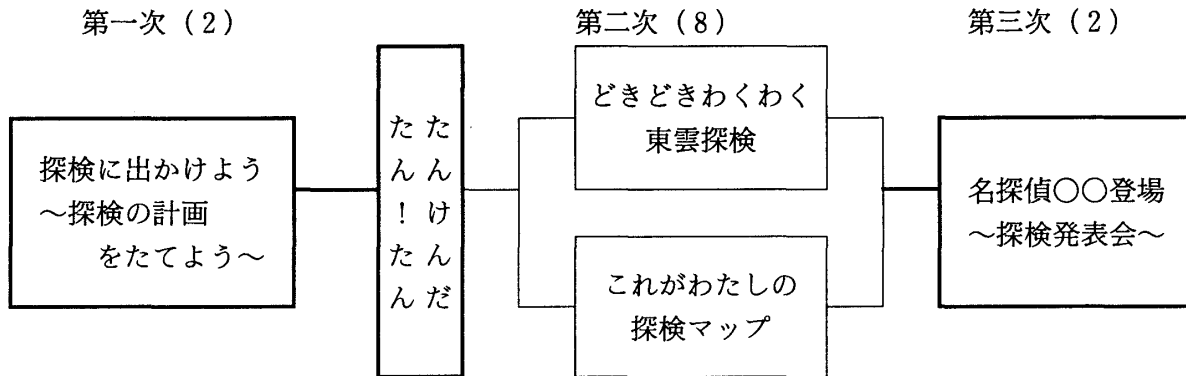
この単元では、6年間の生活の場である学校周辺をそれぞれの興味関心にそっためあてを大切に探検していく。活動に当たっては、探検マップも利用していくようにする。この探検マップは、3年生への橋渡しともなるよう、学校を起点に東西南北に周辺部を伸ばしていくようにしたい。また、自分なりのめあてをもって探検している中で発見したことや「？」を地図に位置付け、みんなでおたずねやおたすけをしていく場としても大切にしたい。そして、新たに生まれた「？」を解決するために、次はどのように探検をしていったらよいかをみんなで考え、自分なりに取り入れて次

の活動へと生かせるようにと考えている。この探検活動で芽生えた身の回りへの興味関心が、どのようにふくらみ発展していくのか楽しみにしている。

(2) 活動のねらい

- ① 自分なりのめあてをもって、探検することができる。
- ② 探検して発見したことを自分なりに工夫して表現することができる。
- ③ 学校周辺のさまざまな自然や建物・人々と自分とのかかわりに気づくことができる

(3) 活動内容と計画.....12時間



(4) 活動の概要

① 第一次 ~探検に出かけよう~

学校探検を繰り返すうちに、子どもたちは、少しずつ校内の人やものとのかかわり方を学びながら自信を深め、より積極的にいろいろなものにかかわりたいという思いをもつようになってきた。学校周辺は、子どもたちにとって未知の世界である。「学校の周りはどうなっているのかな。」と投げかけると、早速「探検してみよう。」という声があがった。探検したいことを話し合い、それぞれが町探検の名探偵になるように、めあてや作戦を考えた。以後の探検も自分で振り返られるように、名探偵プリントを使っていくようにした。めあてを見ると、みんな自分の興味関心を大切にして自分のしたい探検を決めているのが分かる。また、「地図がほしい。」という要求があったので、学校の敷地のみを記した地図を準備した。自分で感じた道の長さは、発見の多少によって変わってくるのではないかと考えたからである。

<探検のめあて>

マーク・お店、絵かき・こするさわる見つける・たてもの・いろんなしぜん・かわったもの
 花の色と形・かたち色・さわる・石・生きているもの・いろんなにおい・町の中の音・店の中のしぜん・手でさわる道

② 第二次 ~たん!たん!探検だ!!~(本時4/8)

本時のねらいと仮説

自分なりのめあてをもって探検をしようという意欲をもつことができる。

仮説	各自の探検を地図を通してみんなに伝え合う場を設ければ、次の活動へ自分なりのめあてをもって取り組むことができるであろう。
----	---

評価の観点

関心・意欲・態度	どのように探検しようとしているか。 友達の伝える探検にどのような関心をもっているか。
思考・表現	自分の探検したことや気持ちをどのように相手に伝えようとしているか。 自分の探検をどのように探検マップに表そうとしているか。
環境や自分への気づき	学校周辺のさまざまな自然や建物・人々と、自分とのかかわりについてどのように気づいているか。

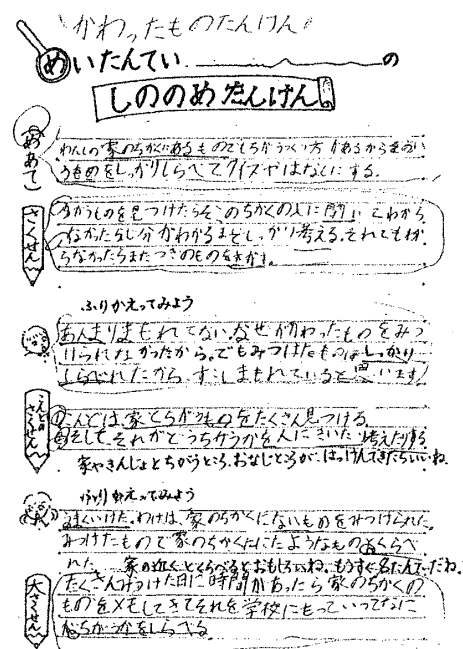
学習の展開

学習活動	みとりの視点	教師の働きかけ
1 前時の探検を床地図に表す準備をする ・床地図など	○自分の探検にどのような気持ちをもっているか。	1 自分の探検を地図に表しやすいように準備の時間をとる。
(本時の活動) 2 探検マップを作る。 3 探検していることを伝え合う。 ・発見したこと ・?と思ったこと ・探検の仕方 ・いいところみつけ ・おたずね ・おたすけ 4 名探偵になる方法を考える。	○これまでの探検をどのように地図に表そうとしているか。 ○友達の探検や表現について、どのような関心をもったか。 ○自分や友達の探検のよいところにどのように気づいているか ○次の探検への意欲をどのようにもつことができたか。	2 教師も励ましたり質問をしたりしながら、子どもが自分の探検を地図を通して振り返られるようにしていく。 3 一人の探検にできるだけ多くの子どもがかかわるように、言葉かけをしていく。 ・ 解決できなかった?があれば地図に示していく。 4 ◎一人一人がより積極的に探検への思いがもてるように、各自の作戦を認め、励ましていく。

1回目の探検では、町工場が点在する西方向を探検した。子どもたちは、各自の地図やメモに発見を書き込んだり、触ったり、集めたりして初めての町探検を楽しんでいた。「時間が足りないので、2回目も同じ場所を探検したい。」という声が多く、1回目の場所を含みながら更に探検場所を広げていくようにした。

<お知らせタイム>

探検後、子どもたちは、床地図に自分の探検を表しながら、お互いが自分の発見を知らせたり情報交換をし合ったりしていた。その後、短いお知らせタイムをとった。ここでは、各自が探検していることや探検の仕方を発表し、質問やいいところみつけなどをしていく。この発表が、自分の探検を振り返り、次の探検に向けてめあてを達成するための自分なりの作戦を立てる場となっている。(名探偵プリント)



探検で同じ場所にも、お店探検の子はお店の中に入ってインタビューをしている。その一方で、お店の前にあるポストに関心をもった子は、集配時刻に興味を引かれてメモをしている。だから、このお知らせタイムで自分の発見や不思議などを発表し合うことが、地図では同じ所でも違う目で調べてみればもっとおもしろいことが分かるかもしれない、という次の探検への期待感を抱かせることにもなっている。探検でポストを調べていた子が、自分の家の近くのポストを調べてきていた。東雲探検と自分の家周辺が結びつき始めているのを感じ、本時の発表によってみんなにも広めていくことにした。

③ 探検と地図を広げて

学校周辺の探検を西、南、北と繰り返しながら各自の地図を広げていった。これまで地図は、学校探検で校舎のみをかいたものを使ってきた。町探検の地図では、四方に空間が広がっている。探検をするうちに、今どこを歩いていて、どの方向に進んでいくのか分からない子も出てくるであろう。地図に振り回されず、少しずつ地図に慣れ、自分の地図になるようにと考えて自分で道路を書き込めるようにした。

1年生のA児は、最初は常掲用の地図の道路を書き写して探検に出ていた。しかし、自分の探検には使わなかった。そのうち、道路によって石が違うのではないかと考え始めた頃から、どこのどのように石があるのかを表すために地図が必要になり、自分の地図を作っていた。

<A児のあのねより>

きょう、せいかつで、みなみにいきました。そしてさいしょに、ほのうのいしをみつけました。そして、ふつうのいしをみつけて、ぶつけました。そうしたら、こながどんどんでてきたので、びっくりしました。そして、水のいしをみつけました。そのいしは、つめたかったので、「ほんものの水のいしだ。」といいました。そしてどんどんあるいていくと、クリスタルがありました。(中略) たのしかったです。

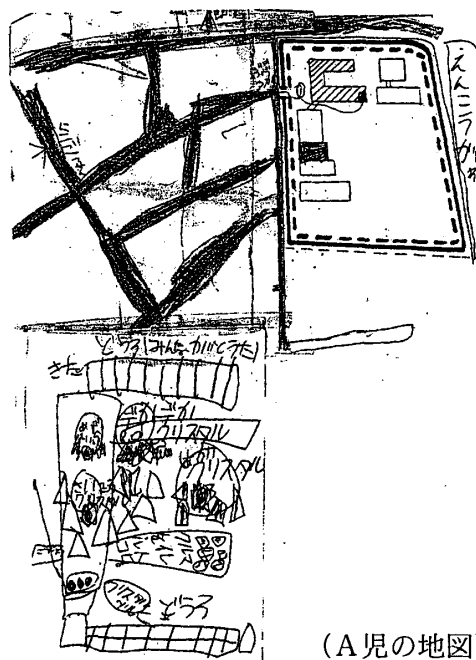
この地図は、A児にとって自分の驚きと楽しさの書き込まれたものになっている。

同じく1年生のB児は、最初からマークを追い続け、その位置を地図に記していった。位置が分からない時は2年生に聞きながら書き込んでいた。

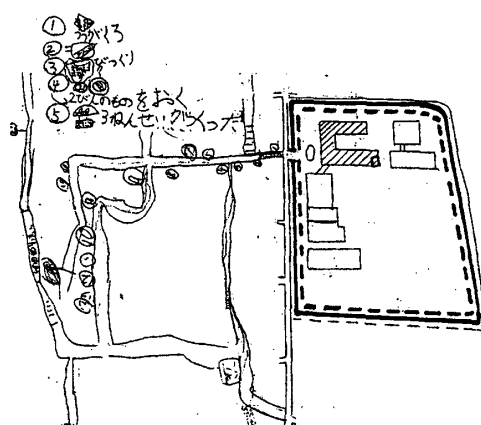
<B児の名探偵プリント(振り返り)から>

めあて : いえやみせや車のマークをかいてどこでかいたかかく。
 1回目のさくせん : すごくびっくりしたマークは、びっくりマークをかく。
 3回目のさくせん : 人にどんなマークがあるかきく。人にきけなかったらじぶんでしらべる。
 さいごのさくせん : マークのよかったところをかみにかく。マークによってどこがちがうかかく。

マークを追い続けたB児は、マークを分かりやすく地図に表せたことに自信をもち、最後には、そのマークにどんな意味があるのかということに興味を引かれ、考え始めた。地図には、その子が今もっている方向感覚だけでなく、興味も表れていくのが分かる。



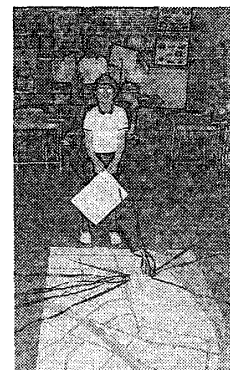
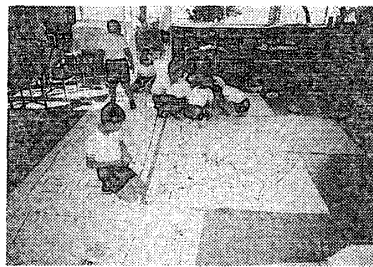
(A児の地図)



(B児の地図)

④ 第三次 ～名探偵登場～ 探検を自分の町へ広げて

探検のたびに、西へ北へと床地図を広げていった。子どもたちは、広がる床地図の方向と自分が地図に書き込んだ発見や場所を見比べていた。そして、歩いた長さとの違いに驚きの声が出た。



こぼくんち
こんになに北なんだ

まっすぐ行って、右に。

こっちが北だから東へ行って。

冬休みの発見では、探検中の自分のめあてと同じことを追究している子が多かった。フロッタージュで探検を続けた2年生は、呉の町のマンホールが東雲町とは違うことに気づき、大発見を本にして発表した。他の町はどうなっているんだろう。とどこかに出かけるたびに、いろいろな発見をしてくるようになった。また、一つのポストから自分の課題が広島市に広がった子もいた。

ポストの本

① 1000町目まで
 ② 1000町目まで
 ③ 1000町目まで
 ④ 1000町目まで
 ⑤ 1000町目まで
 ⑥ 1000町目まで
 ⑦ 1000町目まで
 ⑧ 1000町目まで
 ⑨ 1000町目まで

	平日	休日
1	9:20分	11:20分
2	11:20分	5:20分
3	2:20分	
4	1:20分	

① 中おぼくち
 ② 中おぼくち
 ③ 中おぼくち
 ④ 中おぼくち
 ⑤ 中おぼくち
 ⑥ 中おぼくち
 ⑦ 中おぼくち
 ⑧ 中おぼくち
 ⑨ 中おぼくち

3 振り返って

本実践は、授業仮説にもあるように「地図を通して活動を伝え合ったり、自分なりのめあてにそって意欲的に活動に取り組める子」をめざしてきた。地図を意識したのは、どこで、何を発見したのかをみんなで確かめやすく、そこでの話し合いで次へのめあてを絞り込み、自分の探検の仕方を工夫するのではないかと考えたからである。床地図や常掲地図を使って各自の探検を伝え合うことで、同じ場所でも違っためあてで探検している子どもの違った見方がお互いの刺激となり、自分なりに作戦を考えて意欲的に活動することができていた。また、地図を使う機会を作ることで、3年生以降の社会科学習への橋渡ししとならないかと考えた。子どもたちの地図の書き方や使い方から、低学年では、地図で正確な方位や距離を伝えようとするよりも、その子のその子なりの地図のよさを認めていくことが、地図への抵抗をなくし、地図そのものへの興味を少しずつ高めていくことになるのではないかと思う。

生活科で学校周辺の探検を繰り返しているうちに、帰りの会の「はっけんタイム」での身の回りの発見が、1年生からもたくさん出されるようになってきた。普段何気なく通り過ぎている所でも、見つめ直すと意外な発見があり、不思議があるということに気づいたためであろう。

また、2年生が、初めての町探検でも見通しをもって活動し、1年生にアドバイスをしたり、自分から次々に課題を広げていくことができたのは、学校探検を継続することによって人やものとの関わり方や追求の仕方を学習してきたからだと思われる。これからも、今の活動が自分の生活に広がったり、次の活動に生かされたりするような活動を考えていきたい。